

どてのこたち 新田保育園の歩み

第一章 新田に保育園を

昭和二十二年 新田



渡し船が岸に近づくと、葦の茂みがさらさらと風に揺れます。川向こうには一面の桜草、その先に見えるのは菜の花の黄色でしょうか。モンシロチョウが船頭さんの帽子をかすめて、またどこかへ飛んでいきました。

木造の新田橋は、隙間から川の流れが見えるほどのがたがた橋で、まだまだ民家は少ない時代でありました。人々は、豊島から新田まで、“宮島さんの渡し”という渡し船に乗って行き来をします。

戦後の混沌とした時代の中、人々のくらしは楽ではありませんでした。勤め先自体がなくなり、失業する人も多ければ、運良く残っていた勤め先でも、給料は遅れがちでした。明日のご飯のため、誰もが必死になっていた時代です。配給だけではとても食べていくことはできません。父親のみならず、小さい子を持つ母親たちもまた、内職などの仕事を探さなければなりませんでした。

「うるさい！ あっちへいけ！」

怒鳴られた子供たちが、寮の裏手から、わあっと逃げ出してきました。青鼻を垂らした小さいのから、割れかけの下駄を履いた大きいので、一緒になって走って行きます。鼻を袖で拭いたのか、右袖だけかてかに光っている子も。このあたりは工場が多く、寮もあちこちにありました。三交代制をとるところが多く、昼間は寝るための時間だという人も多いのです。眠りかけていたのに、すぐ外で子供たちにきやあきやあ騒がれてはたまりません。

保育園も何もなかったこの時代、いったい、子供たちはどこで何をして、両親の仕事が終わるまでの時間を過ごすなければならなかったのでしょうか。

大きい子が小さい子の面倒を見るように、親がよくよく言いきかせていたとしても、しょせんは子供、危険なことも多々あったようです。

ああ、川べりが騒がしい。何やら事件が起こったような気配です。

「ゲンちゃんが川に落ちたー」と青くなって呼びに来た近所の子らに、慌てたのは母親でした。封筒貼りの山もそのまま放り出し、途中で突っかけが脱げようがかまわず、土手まで走って行きました。

「雨で増水した川をのぞき込んでいて、ふと足でも踏み外したのでしょうか、幼い子が岸からころけてしまったようです。川は中央でぐっと深くなっており、大きい子たちも助けに飛び込んだものの、川の速い流れに、すぐに足を取られそうになってしまいます。そうこうしているうちに、もがいていたゲンちゃんの姿は、頭が沈み肘も沈み、そして最後に、手のひらが力なく、濁った流れに飲み込まれていきました。

通りかかった大人たちに助けを求め、数名が飛び込みました。中でも泳ぎのうまかった大人が斜めに泳ぎ着き、ようやくゲンちゃんの襟をつかみましたが、もうそのとき、水面に出たゲンちゃんの顔は青白く、目もしっかり閉じたままでありました。半開きの口はびくりとも動きません。あわてて岸に上げ、みぞおちをぐっと押すと、げぼ、という声とともに、ゲンちゃんの口から水が溢れました。弱く息を二回吸った後、大声で泣き始めたので、取り巻いていた皆は安堵したのでした。みんなすぶ濡れで、服から顎からぼたぼたと滴を垂らしていました。

駆けつけたお母さんは、あまりのことに腰が抜けたようになってしまい、泣き続けるゲンちゃんの身体をしっかりと抱きしめたまま、しばらく話すことも、動くこともできませんでした。

小さな子供を持つ親たちは、その事件を耳にしてぞっとしました。今回の事件は、たまたま助けに入った大人がい

だから良かったようなものの、いつか子供たちが、本当におぼれてしまう日がくるのではないか。今度、何かあるのは自分の子供ではないのか――

「こんなことでは。」

子供の安全のために、健やかな成長のために、必要なもの。

新田に、保育園を。

保育園は、皆の願いでした。

よいしょ、と天秤棒を担ぐと、お母さんの両肩には重く棒が食い込みます。たらいの中にいっぱい入っているのは納豆です。わらで包んだ束が何十も入っていて重く、最初の頃には左右にふらふら揺れたものでしたが、もうだいぶ安定してきました。これを担いで街を回り、「納豆ー！納豆ー！」と大声をはり上げながら家々を歩いて回ります。買ってくれる家があるまで、どこまでも歩き続けます。きつい仕事ですが、泣き言を言っではいられません。

初代鹿浜診療所の理事長、伊藤よしえ氏は、皆の生活をよりよいものにしようと、お母さんを集め、「生活を守る会」を立ち上げました。「生活を守る会」では、このような納豆売りの他に、雑巾やオムツ縫い、その他、手袋やハタキなど、仕事を求めるお母さんに、内職の斡旋を始めました。しかし縫い物の内職にしろ、ハタキの制作にしろ、元氣いっぱいの子供をそばに置いていては、仕事にはなりません。ここでも必要になってくるのは、保育の場でした。こうして、伊藤のおばあちゃん先生による、青空保育が始まったのです。

しかしそうはいっても、場所は園舎もない土手で、指導も保育の専門家ではないお母さんたちの、その日その日の集まりです。やはり保育の専門家を、という声があがるのは当然のことでした。

この活動に協力したのが、「生活を守る会」「東芝労組」「理研スプリング」「太平社」「農業組合」でした。それらの